

グラフィオセントリズムと漢字文化圏の思考法

—拙著『話すことと書くことの間にある教育

——道と脱構築の境界を超えて』を執筆して——

Graphocentrism and Chinese Way of Thinking

From Writing the Book "Education between Speech and Writing:
Crossing the Boundaries of Dao and Deconstruction"

講師:台湾 國立嘉義大學 洪如玉 教授

Professor Ruyun Hung, National Chiayi University

日時:平成30年7月6日(金)

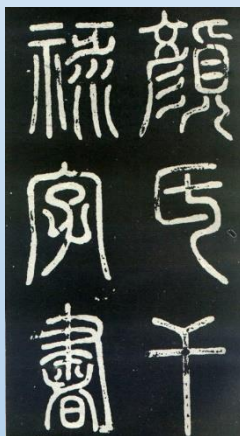
13:00~15:00

場所:大阪大学大学院人間科学研究科

東館304講義室

*この講演は英語で開催されます

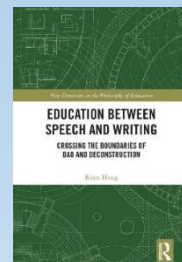
* This seminar will be presented in English



漢字文化圏に暮らす人々は——台湾に暮らす私もその一人ですが——、いつも「書かれた言葉(文字)」に囲まれています。では、私たちは、文字中毒(wordaholic)の社会に暮らしているのでしょうか。このような問いが、拙著『話すことと書くことの間にある教育——道と脱構築の境界を超えて』(2018)を出版するきっかけとなりました。

何年か前、ヨーロッパで研究をしていたころ、私は「書かれた言葉(文字)がない」という状況にたびたび出くわし、驚かされました。このような状況のなかで、私は、これまで当たり前だと思ってきたこと、すなわち私たちの社会や文化には文字が溢れているという事態を、あらためて問い直したいと思うようになりました。このセミナーでは、まず、拙著の最初の2章を参照しながら、漢字を使用する社会が文字で溢れている——文字中毒症候群である——という事態をどのように分析するかをお話します。次に、漢文で書かれた古典テキストの考察を通して、グラフィオセントリズム(エクリチュール中心主義、あるいは文字言語中心主義)が漢字文化圏の思考法の典型であることを論じたいと思います。グラフィオセントリズムは、フォノセントリズム(音声中心主義)と対比をなす概念だといわれています。この対比によって、ある点においては、東洋の世界観と西洋の世界観との違いを明確に示すことができるでしょう。

Through Education between Speech and Writing, I wish to present an innovative and exciting view of subjectivity and education based on the interplay of dao and deconstruction. This book questions and repositions the established relationship between speech and writing, ears and eyes. I argue that the speech-writing relationship is crucial for distinguishing Chinese and Western ways of thinking and thus coin the term 'graphocentrism' as the underlying principle of Chinese thought. (Hung, 2018, p. xiv)



主催:大阪大学大学院人間科学研究科 附属未来共創センター
お問い合わせ: mirai-kyoso@hus.osaka-u.ac.jp